山 538-1990・4・20

第538号 平成2年4月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1990年（平成二年）
4月号（No. 538）

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

故秩父宮殿下ご愛用の品々
……山田二郎…（1）
海外の山……（2）
「フォールダウン」
自然保護講演会……藤平副会長…（3）
東西南北……（4）
「甲南の部内雑誌」「三百名山への道」「ウエストン旧蔵スライドに新事実」「自然環境を守る紙の節約」「会員通信特集(3)」「台北にて」「平成（へなり）山の元日登山」「早発ち」
自然保護随想……梅木秀徳…（6）
タンボチェ僧院再建協力募金者ご芳名……（8）
図書紹介……（10）
「農学博士　竹内亮　業績と生涯研究資料抄」「道南の自然を歩く」
報告……（11）
「A・C晩餐会のサイン入りメニューの寄贈」
会務報告……（12）
2月理事会，ルーム日誌，会員異動
お知らせ……（13）
図書受入報告……（14）
新入会員，住所表示変更……（15）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテープ電話
234 六六五九

故 秩父宮殿下ご愛用の品々

山田二郎

この程、秩父宮妃殿下のご好意により、故宮殿下ご愛用の登山用具（スキー登山靴、クレッターシューズ、ピッケル、雪眼鏡、毛編手袋）を私共の会にお下げ渡し頂くことが出来た。誠に貴重な、また妃殿下にあらせられても、さぞかしもろもろの想い出にまつわるものであろう品々を頂戴したわけで、秩父宮殿下の往時の山でのご活躍を偲ぶよすがとし、また妃殿下のご配慮に感謝申し上げる意味においても山岳会の大切な資料として保管すべきものと思う。

この度のことの使い走りとして一端を担わせて頂いたものとして、その経緯を記録しておくことも重要と考え、資料委員会からのご要請によって一筆する次第。

ことはまことに偶然のきっかけに始まる。昨年十一月十五日、三水会の催しとして吉田テントの吉田喜義さんからテント作り一筋に生きて来られた貴重な経験談を語って頂く集会が山岳会のルームで行われた。

当日の話し相手役は、当初谷口現吉名誉会員になっていた模様だが直前に都合が悪くなり、河野幾雄さんに替って頂き、満員の盛況であった。私も出席して興味深く貴重なお話をお聞きすることが出来た。

ところが、翌日夜私の自宅に大町の谷口さんから電話で「昨日は大変失礼した。君も吉田君の会に出たと思うが、昔吉田がトナカイの寝袋を作って秩父宮家にお納めした話が出たそうだね。昔は慶応にもあったがもう無い。俺も大町へ移って来て山岳博物館からの相談にものっているし、また博物館のために何かして上げようと言う気持もあってのことなのだが、もし秩父宮家では今もってその寝袋をお持ちであったら博物館にお下げ渡し頂けないものかどうか。君からお伺いしてもらいたいのだが。」とのことであった。

早速、私は『旧い先輩をこき使う』と言う会の美風に従い、渡辺兵力名誉会員にこの事をご相談したところ、快く宮家のご内意をお聞きしてあげようとお引き受け頂いた。数日して渡辺さんからご連絡があり、一、トナカイの寝袋は既に無いこと。二、ただしピッケルその他、ご愛用された道具をお持ちで、下げ渡しても良いこと。三、下げ渡し先としては大町の山岳博物館も市立で公共のものであるので決して不適当と言うわけではないが、事務方としてはこれ迄の宮家と日本山岳会の関係を考えれば山岳会の方が適当と思われる。とのことであった。

以上のいきさつを経て去る一月十六日渡辺名誉会員ともども秩父宮邸に参上、妃殿下より前記の品々を頂戴して参りました。流石と申すべきか、当然と申すべきか、何れも保管状態は申し分なく、スキー靴はフォーチュナム・アンド・メースン製（この店はロンドンの有名な紅茶屋とばかり思っていた小生の浅学振りには恥じ入るばかり）、軽い雪上歩行のためかクリンカーを少しお打ちになって居られる。ピッケルは昔風にシャフト（もちろん木製）の長いシェンク製。クレッターシューズは余りたびたびご使用になったようには見えないものの、当時こんな靴をお

はきになっての岩登りまでなさったのかと敬服申し上げた次第であった。

当日は東京地区は近年稀な大雪の日で宮邸の広いお庭はさながら深山の趣きがあり、また妃殿下も大層お元気のご様子にお見受け出来たことは大きな喜びであったし、故宮殿下のお話などもうけたまわって、ついつい長居申し上げてしまった。

また当日は岡沢祐吉会員も同氏がスイスから持ち帰ったフリッツ・シュトイリ氏のガイド手帳を持参され、手帳に書かれた故宮殿下ご直筆のコメントなど懐かしげにご覧のご様子であった。

資料委員会としては頂戴した品を年末迄は市ケ谷のルームに保管し、今年の年次晩餐会で出席者各位にもお目にかけ、その後は大町市立山岳博物館等に保管方委託したい意向。

なお、当会としては過去にも妃殿下のご厚意でマナスル登頂に際しての妃殿下ご直筆の和歌、及びマッターホルンの写真など四葉（いずれも額入り）を頂戴しており、ルームに掲げられていることは会員諸兄ご承知の通りでありますが、今回はさらにこれ等に貴重なご装備類が加わったわけで、重ね重ねのご厚意を有難く肝に銘じる次第であります。

海外の山

フォール・ダウン

コナン・ドイルの空想小説「ザ・ロスト・ワールド」で有名な（などと書くといかにも遠い昔に読んだふうだが、実はマンガでしか読んでいない）、そして最近夜のテレビ「ニュースステーション」で何度となく紹介され、日本では一層知れ渡ることになった南米北部ギアナ高地。そこでの最大の壮観は、テーブルマウンテンから幾条にも直立した絶壁に注ぐ滝群だろう。中でも最大なのが、エンゼル・フォールだ。

山頂から一気に九百七十九㍍の落差を落ちるこの滝には一九八四年、木本哲ら三人の日本隊がテレビ撮影を兼ねて挑戦、滝の左側の壁にルートを切り開いているが、その後も毎年のように外国隊がチャレンジしている。二十億年前に形成された地殻が織りなす舞台装置の図抜けた素晴らしさのせいか、そのいくつかはテレビドキュメンタリーのためのものだ。

エベレストからの滑空をやってのけた男として昨年一月のこのコラムで紹介した、ジャン・マルク・ボアバンの場合も、フランスTF1テレビの冒険番組「ウシュアイア」のためだったが、衝撃は大きすぎた。二月十九日、エンゼル・フォール上部からパラシュートを背負って飛び出したこのフランスを代表する冒険的クライマーは、パラシュートが開かず飛翔に失敗、立ち木に激突して死亡したのである。まだ三十九歳だった。

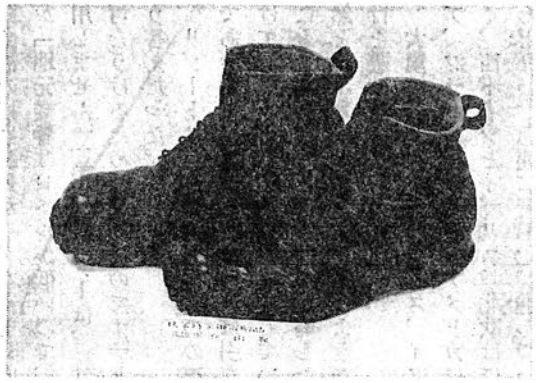
十七歳で登山学校に入ったボアバンの山での二十年の人生は、人間の行動半径への挑戦の連続だった。もともとクライミングだけでなく、スキーも超一流の名手。それに、ハンググライダーやパラグライダーを取り入れて、考えられないほどスピード感に溢れた、広範囲の山遊びをやった。

日本山岳会隊が初めてチベットにチョモランマ偵察隊を出した一九七九年には、K2の七六〇〇㍍地点からハンググライダーで滑空、翌八〇年にはマッターホーン東壁のスキー滑降、北壁の単独登攀、頂上からのハンググライダー降下を一日でなし遂げた。八五年にはガッシャブルム2峰（八〇三五㍍）の頂上から、八八年九月にはエベレストのてっぺんからパラグライダー降下に成功している。

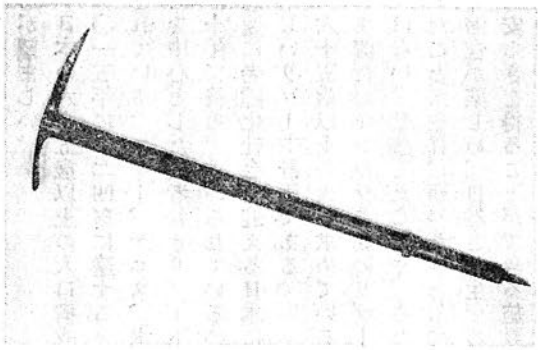
登ることで山遊びの高揚を終了させず、下りることに新しい地平を切り開いたという点でボアバンは、まさしくパイオニアーだった。氷壁を攀じ、雪壁を二枚の板で滑り下り、そして空を舞う。人間の積年の夢を軽やかに実践してみせたが、無論生命の危険はついてまわる。残念なことだが、せめて彼があくまでも自分のために飛翔しようとしたのであり、テレビ撮影のための無理はなかった、と思いたい。

エンゼル・フォールは、もともとインディオたちの間では「チュルン・ヴェナ」と呼ばれていた、と南米大陸に二十年通う探検家の関野吉晴は、書いている。一九三七年、チュルン川沿いに金鉱探しで飛行中欧米人として初めてこの滝を見たアメリカの森林パイロット、ジミー・エンゼルにちなんで今の名となった。

滝が「翔ぶ男」の最後の舞台となった。（江本嘉伸）

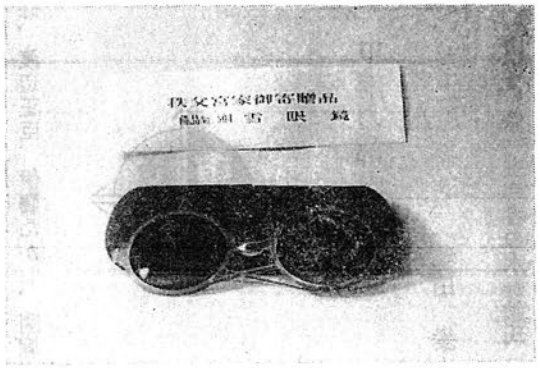


登山靴



シェンク製・ピッケル

クレッター・シューズ



雪眼鏡

毛手袋

報告

立山の夜間照明計画をつぶす
高齢化社会のリゾート計画など

藤平副会長の自然保護講演会

二月七日の藤平副会長の自然保護講演会は素晴らしかった。銀行首脳としての永年の経験と富山県岳連会長の立場からの地についた自然保護論は、淡々とした語り口ながら、内容の濃いものだった。

大規模リゾート開発について

いま計画されているリゾート開発はその殆どが地域の独自性を欠いた、どれもこれも同じ金太郎飴のような発想で、採算性の疑わしいものが多い。こうした計画では必ず山村振興をうたっているが、山村の過疎化は、このような長期ビジョンを欠いた思いつきだけで救えるとは思えない。

世界の先進国は、大なり小なり同じ問題をかかえていて、日本の場合も工業化社会への急激な構造変化によって農業人口は急激に減少し、山村の過疎化をもたらしているのであって、こうした問題は日本だけでなく、世界経済との関連で、地球的規模で考えねばならない重大事である。

いま、日本各地で進められている大規模なリゾート開発は、その地域だけで実行するのは無理なので、実績のある大リゾート開発会社に参加を求めるケースが多い。しかし、その開発会社が、地域振興を第一と考え開発すると考えてはならない。ある大リゾート開

発会社の担当課長から、本音を聞いたが「地元業者はレベルが低いので、利用しません」「第三セクターは、許認可をうけるための隠れみのです」という答えだった。

リゾートは、もともと水ものの事業であって、採算にあわなければ引き揚げてしまう資本の論理が支配していることを忘れてはいけない。荒廃した自然とゴースト・タウンが残るような愚行を避けねばならない。

大規模なリゾートはスイス、イタリア、フランス、カナダ、アメリカに多く、西ドイツとイギリス、北欧はほとんどない。急速に老齢化が進んでいる日本でのリゾートは、自然を生かした形が望ましい。

日本の六十五歳以上の人口構成は、二〇一五年には二四％に達すると予想されている。スキー、テニス、水泳などを中心とした若者むきリゾート時代は十年で終る。求められているのは、急速に老齢化社会を迎える日本にふさわしいリゾート計画である。

六十五歳以上の人が求めているのはいま流行のキンキラキンのリゾート地ではない。仕残したことや、やりたかったことがやれ、ゆったりとして安価な滞在が楽しめ、自然と共生することに安らぎを得ることができる施設ではなかろうか。こうした環境と文化を組み合わせたものが、これからの真のリゾートである。ハードに金をかけ、大切な自然を切り売りすることはない。ソフトが大切なのである。

立山の夜間照明計画をつぶす

地元の富山のリゾート計画についてふれると、昨年、立山を夜間照明するというプランがあった。幼稚きわまりない発想で、早晩つぶれると思っていたが、自然保護団体などが反対運動や要望をしたが効果がない。ある電気メーカーが計画を持ち込み、政治と行政が一体となって、着々と進めているという。

そこで地元新聞に、故郷の意義と、富山の人にとって立山はいかに大切なものと考えられているか、その歴史や故郷のシンボルとしての存在を、時代遅れの経済成長主義者の手に委ねてはならない、また、これからのリゾートのあり方についても書いた。

二、三日後の県議会で県当局が推進の考えのないことを言明した。

そのほか、大日平に馬を走らせるなどのリゾート計画もあったが、ことあるごとに反対を力説したら、先日、知事から大規模リゾート開発はいたしませんと公式言明があった。

以上のような内容の講演の後、自由討議、懇談会に移り意外に豊かな山村の実態、首都圏の農家の江戸時代からの歴史などが披露されたほか、自然保護委員以外の方からも、貴重な意見が出されて、意義深い講演会であった。

また、昨年十月の立山における中高年登山者の遭難と、正月の剱岳および周辺地区の遭難と救助体制、秘話など貴重な話もあって、小人数で聞くのは勿体ないような集会であった。

（関塚貞亨）

出席者　藤平正夫、中　保、松本恒広、二木久夫、鈴木敬吾、澤井政信、山口俊輔、山口悠紀子、大島輝夫、小西奎二、中村純二・あや、市川義輝、林田正幹、黒沢秀雄、横山隆、高島真一、田村説三、奥野道治、石田喜八、池田剛、藤井健、的場大祐、原謙一、岡野修、渡辺正臣、伊藤たかし、関塚貞亨

甲南の部内雑誌

福田　恭次

「山書の会」主宰者の水野勉氏のお仲間、上田茂春さんは学校山岳部の内部雑誌に興味を持たれており、甲南の雑誌も一覧したいとの御希望があった。私達は少し慌てた、と言うのは戦前の古いナンバーは方々に散っていたからだ。

旧制甲南高校山岳部は大正十二年、本会会員の香月慶太氏によって発足を提案され、その後伊藤愿氏等も加わって設立された。戦後も新制大学・高校に受け継がれて今日に至ったが、戦時中を除きほとんど毎年部活動を部報に記録してきた。振り返ってみれば、これは昭和の全期間に渉るものである。

水野氏のお話をきっかけに私達も発奮して、戦前の古いガリ版刷りの分まで含め全七四冊（約五千頁）を手許に集めることができた。そして「山書月報」の蒐書雑誌欄に私達の部報に関していろいろと御紹介頂き、また新制に至るまでの主要目次を掲載して下さったことなどでさらに発奮して、永久保存のためにごく小数の復刻版を作るに至った。私達旧制の仲間は皆老齢期にあるので、共同の青春の形見を整えるきっかけを作って下さった「山書の会」の方々に心から感謝している。

総目次をみると、どの学校でもそうであろうが、私達戦前派には戦後に比べささやかながら初登攀らしいものを味わえるいくつかの登山があった。六甲のロックガーデンに発足した地方の

一旧制高校の山岳部の足どりは、過分な言い方かもしれないが日本のロッククライミング史の一側面かとも思われる。以下は筆者の青春追憶として、手前味噌ながら戦前の部報から主な初登攀とおぼしきものを拾い上げてみた（まちがいがあれば御寛容下さい）。

昭二年七月　伊藤悳　滝谷、小槍単独登攀
昭五年七月　伊藤愿　ジャンダルム飛騨尾根
昭六年四月　田口二郎　天狗岩稜、西穂
昭六年七月　田口二郎　滝谷第二、第三尾根
昭七年七月　近藤実　前穂四峯甲南ルート
昭七年八月　伊藤新一　前穂北壁―Aフェース
昭七年八月　伊藤新一　滝谷第一尾根
昭七年八月　伊藤新一　ジャンダルムT_1北面
昭八年三月　田口一郎　不帰二峯
昭八年四月　田口二郎　鹿島槍東尾根
昭八年七月　伊藤収二　チンネ北壁正面
昭十年七月　喜多豊治　カクネ里正面尾根
昭十年七月　奥山正雄　剱尾根右岩稜
昭十一年七月　福田恭次　剱尾根ドーム
昭十二年三月　山口雅也　杓子東壁
昭十二年三月　喜多豊治　白馬鑓北稜

上記人名は主としてその登攀のリーダー名のみを記した。幾人かの早世した本会会員の名も散見する。古い会員の方々が若き日の岳友を偲ぶよすがの一つとなれば幸いである。

三百名山への道

松田　孝一

忘れもしない、私の住む山形県の庄内地方で、蝉も木から落ちたという猛暑の四十度を越した日。昭和五十三年八月三日、二度目で登頂できた十勝岳で深田百名山を完登。以来十一年余の平成元年九月二十四日、岳友三名と共に快晴の霞沢岳の山頂に立った。同行者がザックに忍ばせて来た「祝三百名山完登」のプレートと記念写真だ。幸いに先着者にシャッターを押して頂けた。この人と我々の後についた二人組と七人で、故郷のワインで乾杯する。展望は申し分なく、穂高や笠、乗鞍と見渡せば、いつもながらの好天のピークの感激だ。遂にやったのだ。

これより三週間前に、島々からほぼ同じメンバーで入山し、雨の徳本峠で断念したのでこの好天が待っていたと思う。その替りに最後になるはずのペテガリ岳が、二百九十九番の山となってしまったのが気の毒ではあったが。

思い返せば、私が山に登り始めたのは、昭和二十六年の夏、高校三年の時に学友数人での二千㍍近い月山だった。北の鳥海山と南の月山に囲まれた庄内にあっては、当然のことのようにまず登るのは、やや低く易しい月山だった。易しいとはいえ、今の八合目まで車で上れる時と違い、各合目に夏だけの笹小屋ができるという長い歩行があるので、夜半の出発だった。

信仰の山である月山には、白装束で登る人がほとんどで、われわれもその例外ではなく、足元はもちろん草鞋（わらじ）か地下足袋で、草鞋は当然予備を持たねばならない。

その後月山を一年に一度は登り、三年後にやっと鳥海山へ。この時は地元の講中に入って行くことになった。

続いては蔵王山、吾妻山、朝日岳等の県境近い山へ友人達と登る。それも年に二、三度の山行の内であった。

三十歳の時、北アルプスに一度だけでも行って見たくなり、燕、槍、奥穂、前穂を単独で縦走して感動し、それで止めるはずだったのが逆に翌年から憑かれたように北アルプス通いが始まる。そのメインルートを終わると、今度は南アルプスの山へと向かい、それと同時に近くの三千㍍の山へも足をのばすことになったのです。

昭和四十七年の夏に聖岳と乗鞍岳で三千㍍峰を終えたある時、友人達が日本百名山に幾つ登ったとか、話をしているのを耳にし、帰宅し数えてみると三十座になっているではないか。これだと思い、それからは百名山を目標にすることになる。しかし、これ等の山には一緒に登る人とて稀な田舎のことなので、当然単独で歩くことになり、次第に年間の登山回数も増え冒頭の十勝岳までの六年間で、残りの七十座を登り終えたのでした。

引続き、どれだけ行けるかは不明だか、次にも目標があった方がよいので三百名山にしたわけで、その時百二十六座になっていたので、二百ぐらいは行けるだろうと歩き始めたものです。

その間、キリマンジャロやモンブランも登頂でき、ナキウサギ、キタキツネ、サル、カモシカ、ツキノワグマや四季の色どりの自然と、折々に出会った人達との仲間の広がり、自然と人間の素晴らしさを存分に知らされました。その仲間により、さらに山登りは加速され、単独では無理と思われる山も多くの人達の友情に支えられて順調に歩け、三百名山を達成できたのです。

今後は山にも、一期一会とせず再訪の山や、自分にとっての未知の山へも登行を続けて行きたいと思っていると

ころです。

ウエストン旧蔵スライドに新事実

田畑　真一

ウエストンは写真をスライド化し、これを講演会のさい、幻燈として使うことが多かった。初期の『山岳』を調べれば、こうした講演会の記事が散見する。

さて、ウエストン旧蔵の多数のスライドを所蔵する英国はアルパインクラブである。昭和六十三年九月、アルパインクラブを訪ねられた一志信一郎氏は、このスライドをアルパインクラブの特別許可を受けて複写された。これは長野県南安曇郡堀金村（猿田国夫村長）に建つウエストン記念館（一志信一郎館長）が大切に保管・管理し、一部は館内に展示されている。

ところで高波淳氏（朝日新聞東京本社）は、この複写スライドのうち、南アルプス関係のものに関心を示された。そして一志氏の了承のもとに写真化された。ただし、これはあくまでも調査上の目的からであり、一志氏がアルパインクラブと取りかわされた約束があって、写真などでの公表は固く禁じられている。高波氏はこの写真（つまり、複写スライド）の調査を私に依頼、来宅された。鳳凰山は地蔵ケ岳（二八四〇㍍）のオベリスク状巨岩のわきに小さく人物が写っているものである。誰であるのか、判別不明な小さな写りである。しかし、私はウエストンに相違ないと判断した。ウエストンがオベリスク状巨岩に初登攀したことについては、岳人のよく知るところであり、ウエストン自身も記録（『極東の遊歩場』）を残している。

平成元年十二月十九日、私は日本山岳会の図書室を訪ね、『極東の遊歩場』の原書を調べてみた。すると、何と同じ写真が載っている。つまり、原書に載る写真と、ここで取り上げた旧蔵スライドとは一体のものだった。人物がウエストンであることも断定して差しつかえないと思う。ちなみにオベリスク状巨岩に初登攀したときのようすについても幻燈によるウエストンの講演会が開かれたことがあった。初期の『山岳』が伝えるところである。

最後になったが、関係の年譜として、島田巽氏をはじめ、川村宏、三井嘉雄、安江安宣諸氏の労作「W・ウエストン年譜その2」（『山岳』第八十三年）を

【自然保護随想】

カモシカか人間か

「カモシカガタイセツカ、ニンゲンガタイセツカ」――二十年ほど前、祖母・傾山群の原生林伐採反対運動を始めた九州の仲間たちのもとへ、このような電報が昼夜を問わず届けられた。発信者は山麓に住み、伐採・運搬の下請けをしている人たち。急激に過疎化が進むなか、営林署払い下げの森で仕事をすることは、地元の人々にとって貴重な現金収入を約束してもらえることであった。

一方、自然保護運動の立場からは、森林の重要さを説いても耳を貸してもらえず、やむなく特別天然記念物ニホンカモシカの保護を前面に押し出さねばならなかったといういきさつもあった。伐採反対の火の手が大きくなるにつれ、山で生活している人々が収入の途を断たれるのを恐れ、こうした抗議電になったわけ。発信者の名前は違っても、電文が同じということは、裏に組織・指示者がいることを容易に想像させた。

九重山群の広大な草原に開発業者が入り込み、地元に甘い餌を示した時もそうだった。「絵にかいた餅が食えないように、美しい風景だけで腹はふとらない」と、住民の反発が保護運動推進者に寄せられたものである。

板挟みとなった保護運動に対し、お役所は「保護に留意しつつ森林施業をする」「開発と保護を両立させる」と、現実的にはありえないような約束をして鉾先を鈍らせようとしたし、運動側も理論武装が不十分なまま試行錯誤を繰り返した。そのなかで原生林は確実に切られ、草原は蝕まれた。さらに大がかりなリゾート開発の波も押し寄せている。

そして今、自然破壊＝環境破壊、ひいては「地球が危ない」とも叫ばれ始めた。原生林や草原の地元の人たちのなかからも「これ以上に緑がなくなっていいものか」と危惧の声が出始めた。「チキュウガタイセツカ、ニンゲンガタイセツカ」の電報は来ないだろう。だが、総論には賛成しても、各論になると難しい。人類が危機にさらされているとの図式を描いてみても、今日・明日を食っていくためにはどうするか。自然保護＝環境保全運動が本当の正念場に立たされる時が来たように思う。

（梅木秀徳）

参照されたい。

自然環境を守る紙の節約

山口　一孝

未来の地球規模での環境保全問題が、内閣で政治の最重要課題に取り上げられ、政府は環境各界の代表専門家による委員会を早急に発足させる事を決定したが、わが日本山岳会は既に緑の山の環境を次代に保全する委員会をもち活発に活動しているのは卓見である。

最近わが国の莫大な木材需要は国産の他、東南アジア、中国、カナダ、ソ連、南米からの輸入で充たされているが、伐採林の再育成が間に合わず、緑地の荒廃砂漠化、崩壊、鉄砲水泥流による災害が進み、野生動植物のフロラはもちろん農園経営にも著しい影響が憂慮されている。この問題に先立ち、私はまず最近地球規模で急速に増加しつつある大気中のCO_2濃度増加と気候温暖化の関係に注目したい。大気中のCO_2濃度の増加は近年、人類社会の近代的工業化と共に進み、とくにこの数年の傾向には地球環境保全上から、緊急警報必須と言われている。本年の気候の異常な温暖が、それによるものかどうか私にはわからないが、専門家の最大のテーマであろう。一説によれば、新世紀まで異常温暖化が続けば極地の氷が溶け海水位が何㍍か上昇し、それ以下の陸地は沈んでしまうと言われている。CO_2は石油、石炭のボイラー、エンジンによる完全燃焼で発生し、その時の熱が交通をはじめ生産、社会活動、生活のエネルギー源となっているが、限られた資源を無闇に浪費すると罰が当ると思う。燃料消費の効率化を工学的に探究すると共に、無限の欲求を抑え、「勿体ない」と「ほどほどに」を身につけた自然に生きる人生に徹すべきであろう。

木材は石炭、石油以前から必須の燃料であった。樹林乱伐による酸素の再生の減少とフロン等化学物質による大気汚染も問題であるが、私のとくに気にかかることは、わが国で近年世界各地の原生林を伐採し輸入している木材が何に最も多く消費されているか？である。それは今では木造建築の建材ではなく紙で、それもトイレットペーパー等ではなく、広告印刷用とくに新聞紙が圧倒的であると聞いている。

今朝のある日刊紙の東京版は三二面で一七五㌘であるが、それに色刷広告一三五㌘が添付されている。紙面中一八面は本文三分の二以上で、東証株式第一報、株式ランキング、テレビ、ラジオ番組を含む。本文二分の一以上が五面、全面広告は九面であった。庶民がまず目を通す土地住宅の情報は慎ましくリストされているが、大企業等の全面広告はナンセンスと思われる大きな活字と、写真と余白が大部分を占めていて、デザインでスペースを圧縮する余地が充分に考えられると思う。これは激しい企業間競争の必然であろうが、もし紙面が節約されたらば焼却、捨て去られる古新聞の量が減り、森林環境保全につながるものと期待している。

（平成二・一・一〇）

会員通信特集 (3)

八八年十月に油彩画の個展を開きましたが、九十年三月にも開くべく準備中です。前回はネパールの街だけでしたが、次回はネパールに加えてスイス、アルプスの絵も予定しております。

新潟・佐藤俊彦（四八二三）

＊

年齢、体力に合わせて、年三～四回近くの浅草岳、尾瀬等に山行しています。地方会員へのご配慮を感謝しております。

新潟・春川正生（四九三五）

＊

七月に転勤で大阪へ移りました。東京在勤中には、三水会の方々にお世話になりました。こちらへ来てからは剣山、氷ノ山、裏六甲などを歩いています。

大阪・川俣俊一（五〇〇七）

＊

相変らず花の山旅を主として山登りを楽しんでおります。今年は念願のキタダケソウに逢うことができて幸いでした。

静岡・望月計市（五一五七）

＊

本年は年次総会、戸隠での自然保護集会、山陰支部の大山の集いなどに参加し、多くの会員と交流を深めました。熊本支部も四十名を越え、例会も盛会です。年末は台湾・玉山に登ります。

熊本・本田誠也（五二四一）

＊

今夏初めて、山研を利用させていただき、徳本峠・岳沢への散策を楽しみました。

兵庫・田辺昭雄（五二四九）

＊

新しい山の仲間とお会いして山に行けない慰めにしています。麻生武治さんもお元気で、時々楽しい良き時代のお話を伺っています。

神奈川・小原晴子（五四五八）

＊

家の裏山を一万歩を一時間二十分で

雨天以外毎朝歩いて体調をととのえています。海抜五〇〇㍍、年間二五〇回以上になり、気分的にも爽快です。
静岡・水野公男（五五三四）

＊

白鳳会と武川山岳会に籍を置き、今年も白鳳会が六五年間続けている韮崎駅前に開設の夏山案内所の事業に参加し、登山者に安全登山を呼びかけました。
山梨・二塚謙三（五六六一）

＊

九月四日、藤木祭に出席、二四年ぶりに滝谷出合まで行ってきました。
東京・小沢武磨（五六六五）

＊

『越中立山古記録』第一巻を、私が拙い力で解読し、解題し、ようやく刊行にこぎつけました。刊行者の「立山開発鉄道ＫＫ」に日本山岳会へ寄贈して欲しいと話しておきました。
富山・広瀬　誠（五五七五）

＊

一月湯沢へスキー、二月乗鞍岳、三月伊吹山、五月両神山、瑞牆山、乾徳山、七月蓼科山、八月甲斐駒、仙丈、九月平ケ岳、皇海山、十月木曽御岳、十一月赤城・黒桧山。まだまだ現役のつもりで頑張っています。
千葉・高橋正彦（五九〇一）

＊

野口東九州支部長死去の際は本部はじめ各支部からの弔辞、弔電ありがとうございました。
大分・梅木秀徳（五九〇八）

＊

四月から八月までカラコルム、八月カナディアンロッキー、九月から十一月ヒンズークシュとラジ全域の取材で留守に致し、そのシワ寄せでてんやわんやの毎日です。現役として動くためには仕方ないことですが、仲々出席できず申し訳なく思います。
東京・白籏史朗（六〇六八）

＊

半年ほど前から眼を悪くして週に一度通院中で、土曜会も長らく欠席しております。
東京・名児耶達男（六〇七五）

＊

丸四年間、トライアスロン競技に傾注し、マアマアの成績を残しました。自転車部門では日本人のベスト三十に入ったこともあり、この脚力は山をやっていたお陰だと思います。ボツボツ山が恋しくなりました。
静岡・久保田保雄（六二七〇）

＊

今年始め、三ヵ月入院し、三度目の手術を受けて療養中。山はだんだん遠のくばかりです。
岐阜・酒井昭市（六四一九）

＊

今年はドロミテ、チロルを歩いてきました。十月に涸沢へ行きましたので山研に立ち寄りお茶をご馳走になりました。
愛知・佐藤はまゑ（六五四一）

＊

思いがけなく機会を得て、十一月初旬に霧島山系の縦走と開聞岳登頂を果たすことができました。雪国生まれの小生にとっては、全山照葉樹に包まれた、いかにも南国的な開聞岳がとりわけ印象的でした。
東京・上野英世（六五七一）

＊

月二回以上の山行を目標に、近郊の山にでかけております。今冬は北八ヶ岳をウロウロしてみたいと思っております。
京都・山路岳夫（六六〇二）

＊

現在野鳥の観察に熱中しています。関西支部で「第一回藤木祭」に参加しました。
兵庫・福原洋一（六六六〇）

＊

府民対象の自然観察会にスポーツ少年団の自然ハイキング等と矢つぎ早に催しが多く多忙です。今やっと自然環境を見直すグローバルな運動が世界中に広まり、我々の微力な運動もやっと世相の話題にのるようになりました。これもＪＡＣ先輩のよき指導のお陰と有難く思っています。
大阪・出口一良（六七〇〇）

＊

明年三月、プモリ遠征（徳島大学山岳部）の指導をしています。
兵庫・大島秀夫（六七二四）

＊

手がけて六年半、やっと『石川の山』も完成してほっとしているところです。
石川・太田義一（六七五六）

続く―

タンボチェ僧院再建協力募金者ご芳名

二万円―女子登攀クラブ。一万円―秋月良造、重村伝平、法政大学体育会ワンダーフォーゲル部、高本信子、北村節子、江本嘉伸、星憲臣、加治甚吾。五千円―塩入章夫、園山鋭一、三原洋子、藤井正彦、福森利明。

三月三日現在累計一七〇名、累計金額一、六六六、〇〇〇円。

募金振込先
銀行　協和銀行市ケ谷支店　普通預金　口座番号　三六五四六六
郵便局　東京七―三〇六〇一
口座名　タンボチェ僧院再建協力会

♣　♣　♣

台北にて

二十八年前一緒に登った、台湾山岳協会の蔡礼楽、林樹封さん達と、久し振りに一杯やろうと言うことになり台北へ。日本山岳会静岡支部創立四十年、私の古稀、七十歳。そして二十八年振りの会合と祝いを三つ合わせての会合。会長の周百錬さんも八十三歳。健在。

二十八年前の台湾とは、スッカリ総べての変化の激しい、経済大国に成長した台湾。もう少しで日本に追い付くと思います。

明日は阿里山の日の出を拝みに出発します。　10・FEB・1990

（山本朋三郎）

（編集部宛）

平成山（へなり）の元日登山

安藤　忠夫

平成二年が明けた。平成元年は一月八日から始まったので、平成になって初めての元日を迎えたことになる。それを期す気分もあって、元日の早朝に一人で平成山へ登ってみた。岐阜県武儀郡武儀町の平成集落の奥に位置する薮山である。

昭和から平成の時代に入って、一躍脚光を浴びた一つにこの平成地区がある。戸数九戸、人口三十数人。林業のほかにはシイタケ栽培で細々と暮らしていた美濃の寒村である。ところが平成の時代に入ると、急に人波が溢れだし、五月の黄金週間には一日五千人を越える観光客が殺到するようになってしまったという。なお、この地区は「平成」と書いて「へなり」と読ませているが、平成はこちらの方が元祖というわけである。

名古屋から車で約一時間。刃物の町・関市と飛騨の金山町を結ぶ県道から分かれ、十分ばかり入るともう平成の集落だ。元日の朝とはいえまだ六時前である。薄暗闇の中にひっそりと静まりかえり、人影は見られない。にわか造りの土産物店とその案内の旗が林立し、いかにも急ごしらえの観光地といった風情で、落ち着いた山村のイメージからはほど遠く、違和感を覚える。

集落からほぼ西方に向って延びる林道に車を乗り入れた。舗装された平成川に沿う車道である。鬱蒼とした杉林のいたるところにシイタケの榾木がうずたかく積みあげられている。林道は幾つにも分岐し、そのたびに地図を広げ、地形を確認しながら奥へ奥へと進んで行く。もちろん、要所には導標が掲げてある。やがて舗装がきれて地道に変わった。前方を一瞬の間に横切った動物がある。車のヘッドライトにチラッと照らされただけだからよく分からなかったが、キツネかあるいはタヌキだろう。やがて、車を乗り入れることが不安になるほどの悪路になった。幾つ目かの分岐に出合ったことを機会に車を捨てることにした。

ようやく元日の朝が白々と明けて来た。もう、山頂も間近だろうし、頂まであまり時間を要しないと思われるが、念のため登山靴に履き替える。六時三十分、防寒具のほかには数個のミカンとリンゴ一個だけをデイパックに詰めて車を離れる。所どころにうっすらと雪が残っている。さらに五〇〇㍍ほどで車道が終った。森林組合のマイクロバスが止めてあり、ここで初めて先行者の一団のあることを知った。

林道の終点からは、小さな沢沿いの登山道をたどるようになる。杉の植林帯を二十分も登ると切り開き地になり、急に展望が開けた。登って来た谷を隔てた高曝山（たかやれやま）（約四四〇㍍）が馬鹿に立派な山容を見せ、その峰続きの平洞の頭（四二四・二㍍）もまた鋭角的な三角形の姿をして、共に登行欲をそそる。一方、目的の平成山の全容は分らないが、こちらは取りえのない台地状の山のようだ。

登山道は、ここから平成山の山頂直下を南方へトラバース気味に平洞の頭との鞍部に向かい、さらに鞍部から逆に尾根上を北に向かっている。赤松の林の中をゆるゆると登って行く。ほとんど勾配のない道は奇麗に刈り込まれている。

山頂へは、あっけなくも七時十分に着いてしまった。頂には平成元年一月八日に武儀町役場が建てた標杭があり、「平成山　三八一㍍」と記されてあった。雑木林に覆われた何のへんてつもない山頂である。先行者たちは展望のきく平洞の頭に向かっているのだろう。一人だけの山頂だった。

赤松の疎林に阻まれて展望はきかないが、木の間越しに奥美濃の前山たる高賀山の山群が見られる。初日の出の時刻だ。が、東の空には雲がかかって、わずかに赤く染まった薄雲がそれを物語っているだけだ。

時折白い粉雪が飛んでくる。ツピーツピーツーとシジュウカラの小群れが梢を渡って行く。それを汐に下山の途につくことにした。平成の集落まで下

次代に残そう美しい山と渓

ると、広場で榾木を燃していた村人から甘酒を振る舞われた。（国土地理院五万分の一地図「美濃」参照）

早発ち

深谷　泰

年をとっていくということは悲しいことである。重い荷物は持てない。幕営もする気が起きない。それでいて残雪の山稜、新緑の道、紅葉の林へと、想いは消えないから厄介だ。

仕事が忙しく、休みのとりづらい環境にいると、山への意欲はたしかに低下してくる。若い時は、そんな中で無理をして家を飛び出すことにへんに意気がっていたものだ。しかしこの頃は疲労感がとれず、気持ちの上では出たいのだが体が反応しない。思い切って出てしまえば何のことはない。何でも見てやろうと、持ち前の欲深さが出てくるのだが、その切り換えがどうも昔のようにうまくいかない。

ひとつの動作からつぎの動作へ移ることが億劫になる。地図を探すのさえ面倒くさいときがある。そして忘れ物。致命的なものもあった。相棒の靴ととりちがえ、下山して初めてお互いに気付いたというバカな話もある。

「山へ出かけるには、山行日数の倍の日数を準備に費やさなければいけない」とは誰かが言っていたが、私の現状はこれとほど遠い。出かけられる状況になったら準備もなく飛び出す。あれこれ考えるのは面倒だ。ただ大勢としては、いつも心構えはできている。

そのようないい加減な自分ではあるが、ひとつだけ心懸けているのが〝早発ち〟ということである。

くたびれたロートルが、頂上を必ず極めようとするならば、人より早く出ること以外にない。奥美濃の日帰り山行も未明に家を出る。仕事を終えて前夜発の場合でも、民宿の予約の時に朝めしも昼弁当もおにぎりで頼んでおく。着いたらすぐ風呂へ入り会計もすませて寝てしまう。未明、宿の人が寝ているなかを勝手に出るというパターンである。体力のおとろえは時間でカバーする以外にない。

「お江戸日本橋七つ立ち」の唄も、七つというのは午前四時頃出発したことをさしている。未明の薄暗いうちに出ることは、陽のあるうちに長く歩けて安全であり、所要日数も減り経済的だった。駕籠や馬に乗るのも朝のうちの方が値段も安かったという。そして初めのうち乗物に乗って足を休めておき途中から歩く。目あての宿場も近くなり足がはかどったという。先人の知恵というものだろう。

山の夜明けは美しい。森林帯を抜け出た稜線でご来光に会えば最高である。昼には頂上に立ち、帰路は、樹木や下草や岩石まで、自然の全てが愛おしく、カメラを向けてその中に浸るのだ。

図書紹介

『農学博士　竹内亮　業績と生涯研究資料抄』

村上　巌編

福岡在住の会員村上巌氏（二五二八）から表題の書物を私宛に贈られた。それは右書中に掲載された『山岳』14―2所収の「石狩川上流の旅日記より」をリコピーして呈したことに対してのご厚意であるが、竹内氏は後記のように本会にとっても関係深く且つ右書は古い資料をリコピーし、また油彩をよくされた竹内氏の油絵のカラープリントも数多く挿入され、二十部限定という少部数の書物（非売品）であるから私個人が蔵するより本会の図書室に納めたいと思い、会へ寄贈した。

竹内亮氏は明治二十七年生、大正四年九月北大農科林学科実科入学、六年十一月日本山岳会入会（五七七）、七年北大卒王子製紙入社苫小牧分社山林係、大正十一年九州帝大農学部助手植物学教室、昭和七年八月福岡山の会創立、九年農学博士、十四年満州国林野局勤務のため渡満、敗戦後も中国に留まり国立長春大学院教授等歴任、三十二年帰国東北パルプ嘱託等、五十七年五月福岡山の会創立五十周年に際し同会名誉会長に推薦された、五十七年十一月田無市第一病院で逝去、八十八歳。

以上が同氏の略歴だが、戦後の本会会員名簿から同氏の氏名が脱落したのは、敗戦時の混乱と戦後十余年も中国に滞留されたため、会との連絡が途絶え自然に会員籍から離脱したものと想像される。従って逝去された当時も本会の記録には遺憾ながら何も残っていない。

しかし同氏は『山岳』誌上に長期に亘り二十数篇もの寄稿があり、また戦前戦中の会報にも七点の稿を寄せられていて、会として看過し得ぬ会員といってよく、その内容の大部分は九州の山全域、一部は北海道の山、渡満後の長白山等であるが、九州の山ではまさに先駆者であった。

村上氏編の本書には右の中石狩川上流の一篇が全文収録されているが、その他は主として九州の山の記文と在満当時の著作の一部である。

書物のツカ六㌢に余るB5判の大冊を、一人で製作された八十二歳の高齢者村上氏の貴重な労作であり、同氏の竹内氏への傾倒が強く感じられる編纂である。（平成元年十月発行）

その後村上氏から『農学博士竹内亮学究と山の生涯』と題する、表題の書物とほぼ同様の造りの分厚い一冊を送られた。福島一馬・村上巌編で昭和六十一年八月発行、限定十部とある。副題に「書簡・業績・追悼」とあるが、多くの頁が竹内氏の古い書簡にあてられている。

（望月達夫）

道南の自然を歩く

地学団体研究会道南班編

道南というのは北海道の南部を指し、魚の尾のような渡島半島がこれにあたる。

北海道各地の地学すなわち地形学、地質学、鉱物学、岩石学そしてさらに広く地理学的なガイドブックがこれまでに石狩、空知そして十勝の各地方について作られた。このシリーズのもっとも新しいものが『道南の自然を歩く』である。

その占める面積はほとんど関東平野に匹敵するから、調べるのもまとめるのも大変な仕事になる。多くの人たちが文字通り足で歩いて確かめたそうで、信頼できるデータが分かり易く述べられている。このシリーズは全てそうだが、子供を連れていって説明できるような言葉遣いであり、用語であることが特徴的だ。

山としては名山・渡島駒ケ岳、キリシタン伝説と金山として知られる大千軒岳、超塩基性岩の露頭に基づく特殊な高山植物の分布のある大平山と狩場山が紹介されている。

大平山の名を持つオオヒラウスユキソウは日本産の種類としては、もっともエーデルワイスに近いとされるものだが、カラーの口絵で見ることができる。

ところどころに地学だけでなく、こうした植物（それは特殊な基岩に由来するから決して地学とは無縁ではないが）とか、あるいは道南は北海道としてもっとも古い歴史を持つ地方なので、時には遺跡や歴史などがちりばめられているのも、いわゆる地学の巡見を楽しくするだろう。こうしたサービスは、度を越すと却ってうるさく感じられるものだし、幕の内弁当のようにごたごたしてしまう危険があるものだが、この本のように植物の基岩とか、金山とかに絡めての記述だと効果的であると思われる。道南の山歩きを楽しくさせるだろう。続けて道東そして道北のパートの完成が望まれる。

一九八九年　北海道大学図書刊行会刊　定価一四〇〇円（辻井達一）

報告

A・C晩餐会のサイン入りメニューの寄贈

資料委員会

この度関西在住の富田健一会員（会員番号一六一五番）より、山田会長宛、同氏が所蔵していた一九一九年五月六日のアルパイン・クラブ晩餐会のメニュー二通が寄贈された。本会創立八十周年記念展に出品されたこともあるのでご記憶の方もあると存じますが、このメニューには著名な登山家二十数名のサインが寄せられているもので、同氏が大切に保管されていたものである。

本会資料委員会では、本メニューを額に入れ、会員各位の展観に供すると共に大切に保管することにした。

この二通のメニューの中の一通にはSir Martin Conwayのサインに続き、同じ筆蹟で故ウイリアムソン教授の息子であるDr. Olive Williamsonが講演をしたことが記されている。

もう一通にはSir A.B. Kennedyを先頭に（恐らく長老のためと思われるが…）著名な登山家二十一名のサインが記されている。

望月達夫名誉会員にこのサインの解読をお願いしたところ、二十一名中、十七名の方が解明され、さらに残りの四名についても目下調査中であるので、さらに数名の方が判明することと期待している。

これらの解明された方々の名前を列記すると、この晩餐会当時の会長であるJ.P. Farrar、第二代同副会長J.N. Collie、同副会長A.L. Mumm等、登山史上著名な人々ばかりである。

なおこのサインの他にS. Katoなる日本人の名が見られ、この方がサインを集められたことが想像される。

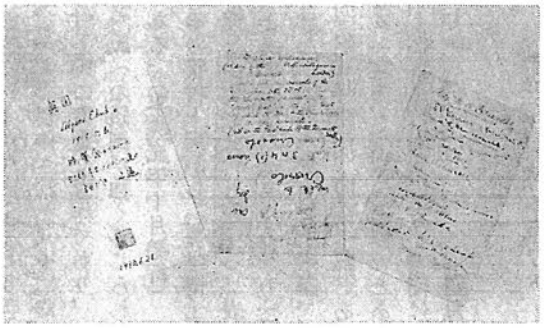
一九一九年といえば、第一次大戦の終戦からそう年月も経っておらず、出席者の一人G・W・ヤングなどは戦争で片脚を失われていた筈である。しかもA・Cの客人として晩餐会に招かれ、この様にメインテーブルに座っている方々のサインを集めたS. Katoなる人物は一体誰なのだろうか。また富田健一氏がどの様な経路で、このメニューを入手されたのか、興味はつきなかった。

そこで富田氏にその間の経緯を尋ねたところ、このことに関係された高野鷹蔵、藤島敏男氏らの書簡の写しを添えて返信を戴いた。

即ちこれによると、S. Kato氏は加

藤栄氏（会員番号五一〇番、大正六年二月入会）で大正十年当時の住所は、大阪府東成郡住吉村帝塚山におられ、高野鷹蔵氏とは旧知の間柄であり、その高野氏の紹介によると、同氏は、住友か藤田組のエンジニアで大阪クラブのメンバーであった由。同氏はウエストン師を通じて、A・C会長のファーラー氏とも交流があり、また武田久吉氏とは植物を通じて懇意であった他、スキーを通じて高田師団の山口十八旅団長(?)、レルヒ少佐とも交流があった様である。

加藤氏は終戦の翌々年に帝塚山から京都都左京区北白川上終町に転居されたが、その折、多数のスキー、山に関する図書を本会に寄贈された由、これは高野鷹蔵氏の要請に応えたもののようで、この図書の引き取りを高野氏は藤島敏男氏に依頼、更に藤島氏が関西在住の富田氏に依頼された模様で、昭和二十二年の三月に、富田氏が引き取りに出かけられ、現在これらの図書は関西支部の蔵書として保管されているようである。



寄贈された A・C 晩餐会のサイン入りメニュー

その後同年七月末か八月初めに、京都の移転先を富田氏が訪ねた折、移転後書類の中からでてきたもの……といってウエストン師、ファーラー会長の手紙と共に、A・C晩餐会のメニューのサイン入りのもの二枚をいただいてこられたとのことで、その後貴重なものと分かり、大切に保管してきたもの……とのことである。

なお、解明された方々の経歴等については、いずれ望月氏等により『山岳』誌上に発表されることを期待している。

（Y・M）

◎会務報告

二月理事会

二月十五日　十八時半～

場所　本会会議室

出席者　山田会長、村木副会長、松田、西村、重広、入沢、穴田、小倉、関口、織田沢、石橋、小林、早坂、藤井の各理事、飯野監事、大島、小倉、鴫原、橋本、大森の各常任評議員

（委任出席）藤平副会長、伊丹、松本、藤本各理事、太田監事

◎会長挨拶

一月十六日、秩父宮家を訪問し、秩父宮殿下ご愛用のシェンクのピッケル他四点を寄贈して戴いた。

一月三十一日には、石岡、石原両会員に対し、名誉会員推薦に関する回答文を送付した。

その他最近の動きにつき報告があった。

◎審議事項

(1)ヒマラヤン・アドヴェンチュアー・トラスト・ニューデリー会議招請の件

山田会長の派遣を承認した。

(2)平成二年度予算第一次案検討の件

西村常務理事作成の予算案につき詳細に亘り説明があり、原則的に承認した。一部修正を加え三月の理事会で最終的に承認することにする。

◎委員会報告

(1)自然保護（松本―松田理事代行）

(イ)新たに藤井健氏（会員番号三四二五番）を委員に追加することを承認。

(ロ)自然保護講演会、自然観察山行の報告。

(ハ)尾瀬入山規制問題につき二月二十七日に検討する。

(ニ)会津駒～三ッ岩岳間の縦走路開拓問題については、次回委員会にて再検討の予定。

なお、岩菅山冬季オリンピック要望書のその後の経緯につき、村木副会長より詳細な説明があった。

(2)高所登山（重広）

二月二十三日、ソ連代表を迎えて高所登山研究会を開催することにしていたが、ミソロフスキー氏が来日中止になったので見送ることにした。

(3)青年部（早坂）

青年部としてパミール・キャンプへの参加希望があるが、高所登山委員会でも計画があるとのことで、合同でJAC隊を出すことにしたい。

(4)指導（小林）

予定通り山スキー講習会を三回に分けて実施の予定。

(5)山研（石橋）

山研の建て替え問題の予算見積り等について、検討している旨説明があったが、村木副会長より、具体的行動に入る前に常務理事会で説明して欲しい旨の要望があり、これを了承した。

(6)集会（入沢）

現地小集会は予定通り一月十三日～十五日の八方山荘スキー集会及び二月四日の加波山山行を行った。

指導者賠償責任保険契約の件については、日産火災海上保険(株)と接衝し

ているが、是非加入してはどうかとの説明があり、質疑応答の結果、指導者…本会負担の方向で前向きに検討することにする。

(7)資料（織田沢）

秩父宮家及び富田健一会員よりの寄贈品を受領。資料目録は逐次会報で報告する予定。

(8)フィルム（織田沢）

今井通子ビデオシリーズ三巻を購入

(9)総務（藤井）

支部長会議、総会は会場の都合により五月二十六日(土)全共連ビルで開催することに決定。

秋の全国支部懇談会は山形支部担当のもと蔵王温泉で十月十三日(土)～十四日(日)に開催することに決定した。

(10)婦人懇談会（穴田）

一月二十～二十一日、八ケ岳登山技術講習会を実施した。五名参加。

十月六～七日、尾瀬長蔵小屋に於て全国婦人懇談会を開催の予定。

(11)科学研究（関口）

二月十七日、マッキンリーの気象遭難に関する研究会。五月十二日には、自然エネルギー利用のシンポジュームを開催する予定。

(12)医療（関口）

来年度の登山医学シンポジュームは七月十四～十五日「中高年の登山と健康」をテーマに開催。翌十六日には、公開講演会を有楽町マリオンで開く。

(13)会報（小倉）

二月号は責了、三月号も入稿。

(14)山岳（大森）

各担当理事より提案のあった掲載希望原稿については、整理、検討した上で、方針を出したい。

◉その他質問、報告事項

(1)未来ビジョン委員会のまとめはどうなっているのか（小倉評議員の質問）

(2)二月二十一日に、外務省招聘客としてニュージーランドのムーア氏が本会を視察する予定。

(3)二月二十六日に、日山協海外登山技術研究会に出席するために来日されるUIAA遠征委員会のジャン・コードレー氏、同委員ブルノー・ランクェル氏、パキスタンのナジール氏、ソ連カザフ共和国より来日する代表団六名の歓迎を兼ねた「海外登山国際交流懇談会」がアルカディア市ケ谷で開催されるが、本会も協力することにする。

(4)本日の入会申込承認者は坪井圭之助氏他十七名。

（Y・M）

ルーム日誌

（2月）

6日　婦人懇談会
7日　自然保護講演会・藤平副会長
8日　青年部委員会
14日　常務理事会
15日　理事会
16日　指導委員会
17日　科学委講演会・マッキンリー
20日　資料委員会
21日　山研委員会、三水会、指導委準備会
22日　図書委員会
23日　科学委員会、指導委打ち合せ
27日　自然保護委員会
28日　山岳編集委員会

2月来室者376名

会員異動　2月

物故

杉山　元治（九〇五九）　1・21
小田島房志（九九七七）　2・26

退会

宮野　芳一（九五二二）
井村　桂子（九二〇二）

☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

◉尾瀬登山集会について

尾瀬は日本に自然保護を喚起するひとつのきっかけをつくりました。環境保護は地球的な規模で論じられている昨今ですが、登山者の立場で私たちも尾瀬に集る日、考え話し合いたいと思います。

ご存知のように尾瀬は植物、風景共に他にはみられない貴重さと特色をそなえています。水芭蕉の季節を中心に夏も秋も登山者が増えつづけ、自然への汚染や破壊も目立つようになり、遅ればせながらこれを防ぎ次代の人たちにつたえてゆくために、○入山人員を制限する○山小屋を撤去する、などの案も昨年あたりから具体的に提案されるようになりました。

しかし、尾瀬の森の中にぽっかりと存在する神秘な湿原、高嶺の花々をひっそり訪れる自由が制限されるのはいたし方ないとしても、ある提案のように指導者という名の引率者につれられて見物するだけのような尾瀬になってもよいのでしょうか。

ゴミ持ち帰り運動や指導員の配置、各小屋による汚水やゴミ処理の工夫などもされてきましたが、入山人員の増加で焼石に水のような状態になっています。目にみえるゴミは少なくなっても沼や川への影響は大きくなっているのです。他の地域についても同じような問題があります。昨年十月香港で開かれたヒマラヤ・アドヴェンチャー・トラストでは、日本の姿勢も問われたと聞いています。そこに出席された会員

図書受入報告

図書委員会

平成2年1月受入図書

1. 地学団体研究会道南班編「道南の自然を歩く」北海道大学図書刊行会　1989（版元寄贈）
2. 薬師義美著「雲の中のチベット―トレッキングと探検史」小学館　1989（版元寄贈）
3. 神奈川県高体連登山部編「青春山歌」かなしん出版　1988（版元寄贈）
4. 田畑吉雄著「山の風音」現代旅行研究所　平成1（版元寄贈）
5. 関野吉晴著「ギアナ高地」講談社　1989（版元寄贈）
6. 小野木三郎著「北アルプス山楽山歩」教育出版文化協会　平成1（版元寄贈）
7. 山村民俗の会編「山の怪奇・百物語」エンタプライズ　1989（版元寄贈）
8. 横山厚美著「山人のムラ」エンタプライズ 1989（版元寄贈）
9. 八木原圀明著「氷壁に刻む―山田昇・八木原圀明二人の登攀史」上毛新聞社　平成2（著者寄贈）
10. 山の気象研究会編「山の気象研究会ニュース 1～50」山の気象研究会　昭和 62（発行者寄贈）
11. 山の気象研究会編「山の気象研究会ニュース 51～72」山の気象研究会　昭和 62（発行者寄贈）
12. 山の気象研究会編「山の気象研究会論文集」山の気象研究会昭和 62（発行者寄贈）
13. 静岡大学西域学術登山隊編「静岡大学西域学術登山隊報告書」同登山隊　1989（山本良三氏寄贈）
14. 宮坂勝彦編「山を想へば　百瀬慎太郎」銀河書房　1989（版元寄贈）
15. 信濃毎日新聞社編「エネルギー複合時代がやってくる」ダイヤモンド社　1989（編者寄贈）
16. S.A.C. ed "Dasgrosse Clubhüttenbuch" S.A.C　1988（クレディ・スイス寄贈）
17. G. Studer "Über Eis und Schnee Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ" 1896, 1898, 1899 Schmid Franeke（岩村俊夫氏寄贈）

2月受入図書

1. 須藤儀門著「続鳥海考」光印刷　平成1（林稔氏寄贈）
2. 広島三朗他著「地球の歩き方 48　パキスタン」ダイヤモンド社　平成2（版元寄贈）
3. 荒木久著「医人岳人　脇坂順一聞書」西日本新聞社　平成1（版元寄贈）
4. 弥永敏明著「やまなみ登山」西日本新聞社　1989(版元寄贈)
5. 藤原優太郎著「秋田のハイキング」無明舎出版　1989（版元寄贈）
6. 河北新報社編集局編「林道 東北の山々で何が起きてるのか」無明舎出版　1989（版元寄贈）
7. 野町和嘉著「長征夢現―リアリズムの大地・中国」情報センター出版局　1989（版元寄贈）
8. 白籏史朗著「日本南アルプス―白籏史朗写真集」山梨日日新聞社　平成1（版元寄贈）
9. C.W. ニコル著「C.W. ニコルの黒姫日記」講談社　1989(版元寄贈)
10. 増永迪男著「福井の山 150」ナカニシヤ出版　平成1（版元寄贈）
11. あつた勤労者山岳会編「こんなに楽しい愛知の 100 山」風媒社　1989（版元寄贈）
12. 中山珖一著「山岳宗徒烏嶺小伝」なかやま出版　1989（小島守夫氏寄贈）
13. 阿部和行他編「日本山岳会関西支部五十年史」日本山岳会関西支部　平成1（発行者寄贈）
14. コリン・フレッチャー著・新島義昭訳「時を超えた旅人―グランド・キャニオン縦断」冬樹社　1989（版元寄贈）
15. 堀江渓愚著「風のテンカラ師」山と渓谷社 1990（版元寄贈）
16. 戸門秀雄著「渓語り，山語り」山と渓谷社 1990（版元寄贈）
17. 谷岡，山口監修「コンサイス日本地名事典　第3版」三省堂 1990（版元寄贈）
18. 古池信雄著「自然を見つめて　古池信雄写真集」小池猛 1990（小池猛氏寄贈）
19. 村上巌編「農学博士竹内亮　業績と生涯研究資料抄」村上巌 平成1（望月達夫氏寄贈）
20. 福島一馬，村上巌編「農学博士竹内亮　学究と山の生涯」村上巌　昭 61（望月達夫氏寄贈）
21. H.W. Tilman "Eight Sailing" Diadem, 1987（購入）
22. C. Bonington "Chris Bonington Mountaineer" Diadem 1989（購入）
23. M. Amin et al. "The Roof of the World" MPC 1989（購入）
24. J. Simpson "Touching the Void" Jonathan Cape 1988（購入）
25. R. Collister "Light weight Expeditions" Crowood 1989（購入）
26. R. Fawcett et al." Climbing" Bell & Hyman 1986（購入）
27. J. Barry "The Great Climbing Adventure" Oxford 1985（購入）
28. P. Gillman "In Balance" Hodder & Stoughton 1989（購入）
29. P. Nunn "At the Sharp End" Unwin Hyman 1988（購入）
30. R. Storer "100 Best Routes on Scottish Mountains" David & Charles 1987（購入）
31. B. Peascod "Journey after Dawn" Cicerone Press 1985（購入）

婦人懇談会

で日山協海外委員長神崎忠男さんにお話を聞く予定です。また、会員近藤緑さんも毎年尾瀬に登られ著作もあり、尾瀬に魅かれる一人としてお話いただきたいと思います。長蔵小屋の平野紀子さんも会員ですが、小屋の立場から近頃の尾瀬へのさまざまな提案に対する感想などを伺い、尾瀬の四季の美しさも話していただき心豊かな一夕を過したいと思います。

当日小屋の風呂を利用すること、石けんを使用することはやめましょう。

記

十月六日　午後、尾瀬沼長蔵小屋集合（当日東京より大清水・沼山峠に貸切バスを出す予定）

十月七日　燧岳登山（希望者のみ）（午後大清水より東京へ貸切バスを出す予定）

会費　七千円（宿泊費、雑費）

バス以外のコースは各自で集合していただきます。入山コースは浅草―東武電車―会津高原―バス―沼山峠、上越線小出駅―奥只見―小沢平―沼山峠など福島・越後各支部に案を立てていただき、参加者にお知らせします。

申込〆切は八月二十五日、事務局まで葉書でバスを利用するかどうか（大清水か沼山峠かを明記）も書き添えて下さい。

◉自然エネルギー利用に関するシンポジウム

山の環境保全の立場からも、将来のエネルギー問題の観点からも、自然エネルギーの利用は重要です。山小屋や遠征基地における現状と問題点について、シンポジウムを開きますので、多数ご参加下さい。

日時 五月十二日(土)午後一時半～五時

場所 青山学院大学総研ビル（正門入った右側）十一階会議室

演題

①総論 （神奈川工大）鳥居 亮

②山小屋での実用化実績

(1)穂高岳山荘(穂高岳山荘)今田英雄

(2)本沢温泉・赤岳頂上小屋 （本沢温泉）原田 茂

(3)白馬山荘 （昭和シェル石油）原田恒久

(4)山小屋における簡易電源システム （京セラ）本多潤一

③海外における実用化実績

(1)三国合同チョモランマ登山隊 （三国合同登山隊）貫田宗男

(2)ヒマラヤにおける実用化状況 （かもしか同人）大藏喜福

(3)南極およびヨーロッパにおける実用化状況（神奈川工大）木村茂雄

④質疑応答およびまとめ （神奈川工大）森 武昭

科学研究委員会

◉第十四回若葉会山行

集会委員会では宮城支部の協力により、左記の通り若葉会山行を行ないます。

日時 六月八日(金)夜出発～六月十日(日)

山 禿岳（かむろだけ） 一二六二メートル

宿泊 鬼首高原荘

＊詳細案内を送りますので、ご希望の方は事務局までご連絡下さい。

◉フィルム委員会の催し

テーマ ビデオ（穂高）観賞とビデオの写し方

講師 羽田栄治氏

日時 六月二十二日(金)六時三十分より八時三十分まで

場所 日本山岳会ルーム

松田敏男山岳画展
―南アルプスを描く―

期日 五月二十九日(火)六月三日(日)十一時～十七時

会場 ギャラリー・ヒルゲート（京都市中京区寺町三条上ル、☎〇七五（二五二）一一六一

藤江幾太郎・山の画展
第三十五年記念展

七月一日（日）～七日（土） 十一～十八時三十分（日曜、最終十七時）

朝日アートギャラリー

JR有楽町・地下鉄丸の内線銀座C4、中央区銀座四―一〇〇（朝日旅行センター隣）電五三五・七七四〇、新作油画一〇〇号～〇号約二十点出品のほか、三十五年記念室を併設します。

〔あとがき〕▲集会、行事などはその「お知らせ」だけでなく、それが終了したら責任者は速かにその「報告」も編集部に送って下さい（あまり長くなく、要領よく）。▲いよいよ本号から平成二年度です。また気を引き締めて頑張りましょう。（A・O）

平成二年四月二十日
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 山田二郎
編集代表 小倉厚
電話 東京(261)四四三三
振替口座 東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一―三―六 赤坂グレースビル
印刷所 株式会社 技報堂